

進路指導において今、学校現場はどのような悩みを抱えているのか。「指導のノウハウが不足している」「効果的な指導教材・資料がない」など、さまざまな声が聞かれるが、最も多いのは「生徒の進路に対する意識が低い」というもの。明確な目的意識を持たない生徒への指導は、どうあるべきなのだろうか。

「今は、各教科の学力をつけるにしても、その前にまずしっかりと目的意識を持たせること、つまり教師が学習の動機づけを図ってやる必要があるになっています」

長崎県立長崎東高校の進路指導部長を務める中川幸久先生は、最近の指導に求められる基本姿勢をこのように考える。長崎東高校では、生徒が自分自身、そして社会、未来を深く見つめ、自分はどう生きるのかを考えていく、いわば人間として生きていく力を養つためのさまざまな指導を「キャリアプランニング」と銘打ち、進路ノートを活用した学部・学科研究、職業研究、また小論文指導など、多彩な取り組みを行っている。

### 生徒を動かすしかけ作り

長崎東高校の取り組みの中でも特にユニーク

後のフォローが行き届かず、そのままになりがちだ。そこで長崎東高校では「スタディーサポート」の結果とともに、付録教材の『スタディーナビゲーター』を生徒に配付、自習教材として活用している。

「朝の補習の時間、生徒それぞれが『スタディーサポート』で弱点だとわかった分野をテスト形式で取り組んで、担当がチェックするという、本校流の使い方をしています」

進路を考えるとき、学習に取り組むとき、いずれにも求められるのは生徒の自主性である。そして自主性を持たせるには、生徒自身が納得できる目標を設定できなければならない。「スタディーサポート」は、長崎東高校の生徒自身による学習面の課題発見と、その克服のための具体的な取り組みに役立っているようだ。

### 生徒の学習習慣を把握

生徒の学習習慣をできるだけ正確に、詳細に把握することは、学習指導において非常に重要である。中川先生は語る。

「それぞれの生徒がいついったいどんな勉強のしかたをしているか、予習と復習のどちらに力を入れているか、また、辞書は上手に使っているか、読書の質と量は……など、学習に結びつく

で、かつ生徒の進路観育成の中心的役割を果たすのが、2年次の「ドラゴンプラン」である。生徒は志望学部ごとにグループに分かれ、研究内容や施設・設備に関する資料収集、オープンキャンパスへの参加、レポート作成などを通して、

**長崎県立長崎東高校**

**生徒が自ら進路を考え、学習に取り組むしかけを作る**

て、およそ1年間に渡って大学・学部・学科研究を行っていく。

「各グループには顧問の教師がつかますから、従来のクラスの枠組みを越えたもう一つのクラスができるわけです。グループごとの活動で自分の知らなかった世界をかい間見て、進路に対する視野を広げ、意識を深めてもらいたい。受験間際になって『どこを受験すればいいのだから、

生活上のポイントを押さえておくことは大切です。これまでも本校では、学校独自にこれらの状況を調査していましたが、『スタディーサポート』の導入によって、より客観的なデータが、長期的かつ均質に収集できる環境が整いました」



長崎県立長崎東高校 中川 幸久

昭和28年長崎県生まれ、数学科担任。昭和63年より同校に勤務。平成8年度より進路指導部長。地元国立大志向が強い中、さまざまな大学を視野に入れた進路選択をめざし、昨年度から東京都内大学見学会などを実施

を取り出して話をするより、学習時間やその取り組み方を分析したうえで、学年集団としての展望を話す方が、保護者にとっては説得力がありますね」と、中川先生は「スタディーサポート」のデータの保護者会への活用効果を強調する。

「生徒の学習状況を把握することは、当然、保護者だけでなく教師自身にとっても状況の正確な認識につながります。その学年に対するこれまでの指導のあり方はどうだったのか、振り

つ?』などという生徒を減らしていければ、と思っ

### 生徒が自分の課題を知る

生徒が自発的に進路について考え始めるきっかけ作りが、3年間を通して頻繁に行われる長崎東高校だが、学習面でも生徒が自らの課題を発見、具体的に次の目標を設定し、それに近づけるようしかけを作っている。

「生徒は模試の結果などを見ると、つい点数だけに目が行きがちですが、本当は学習の到達度や弱点こそを把握してもらいたい。そこで1、2年生のそれぞれ夏休みと春休みに『スタディーサポート』を実施することを考えました。どの科目のどんな分野が苦手なのかといった基礎学力の実態を、生徒自らが把握できるのでは、という期待がありました。また『スタディーサポート』で成績のベースにある毎日の生活の様子、学習に対する取り組み、将来の夢などを、生徒1人ひとりと、学年全体の両方の視点で見えています。一般の模試とは全く違った使い方をしているんです」

また、模試などでは弱点が把握できてもその

返って検証するよい機会ですからね」

### 指針となるデータ活用を

集計したデータは生徒にも参考のために見せるようにした。ただし、生徒にとってはこれらのデータはある意味では「普段の生活の自分」を反映したものにすぎず、新鮮な驚きを持って受け止められるものではない。大切なのは、収集したデータにどのような肉づけをして、生徒に還元するかどうかだ。

「単に学習時間が多いか少ないかだけに着目してもあまり意味がありません。勉強時間は増えているのに成績が落ちている生徒がいたら、それはどうしてか。どの教科においてどんな勉強のしかたが不足しているか。また、学習時間をもっと増やすなら、生活の中のどんな部分を当てればよいかなど、教師が分析し、生徒に提示することが大切です」

長崎東高校が「スタディーサポート」を導入してまだ2年目。これからデータを積み重ねることによって、過年度比較による未来予測なども充実してくるだろう。「スタディーサポート」それぞれの結果より、継続して収集したデータをどう生かすかが重要」と語る中川先生。今後は、模試の結果と学習時間の変化の相関関係など、独自のデータを蓄積していきたいという。

『スタディーナビゲーター』は、10年度から学習情報誌に内容が変更されています。